
地球温暖化物語

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球温暖化物語

【Nコード】

N1012F

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

21世紀後半、地球温暖化は今よりさらに深刻な状況になっていった。そのため、ホツキョクグマは絶滅が秒読み段階になり、海に沈む国も現れた。食料をめぐるゴタゴタで、日本と外国との関係は悪化し、国民は自分達で食料を自給しなければならない状況になってしまった。日本の車社会は行き詰まり、病気の蔓延も心配されていた。これは、地球温暖化を食い止めることが出来なかった未来の世界を描いた作品である。

影響 1 世界終末時計 11 時 59 分

20世紀末から21世紀半ばにかけて、我々は経済の発展のために大量のエネルギーを消費してきた。

それと引き換えに、我々は深刻な地球温暖化問題を引き起こしてしまった。

21世紀になってから半世紀以上の間、世界の人々は、出来ることをしながら何とか食い止めようとはしてきた。

しかし、各国の間にはエゴや妥協が飛び交い、足並みはそろわなかった。

市民の間には、自分達が生きている世代さえ良ければ、後は野となれ山となれ。後の世代なんて自分達にはもう関係ないという意識が少なからず蔓延していた。

そのため、地球を救うための十分な対策は数十年もの間、とうとうされることはなかった。

結果として、21世紀始め頃に生きていた人達は、負の遺産を子の代、さらには孫の代に引き継がせてしまった。

その結果が、このような結果を招いてしまった。

20××年のこの日、ついに世界終末時計が11時59分を指してしまった。

これまでこの時計は、21世紀初頭は11時53分、55分を指していた。

20世紀において世界の終末を意味する12時に最も接近した時は1953年に記録した11時58分であった。

これは世界が核戦争の危機に陥った時の時刻だった。

しかし、それから100年以上が経過した今では、行き着くところまで来てしまった地球温暖化と、それによって世界中を襲った悪影響のために、結果として核戦争以上に深刻な時刻になってしまっ

た。

21世紀後半のこの時代でも使用エネルギーを節約し、地球温暖化を食い止めようとする人はいた。

しかし、すでに北極の氷は全部とけてしまい、ホッキョクグマはいよいよ絶滅が秒読み段階になっていた。

海面の上昇のために、近い将来海に沈んでしまう国では、深刻な環境難民問題が浮上していた。

プロ野球は、平日でもデーゲームでなければ開催出来ない状況になっていた。

かつて日本に食料を輸出していた国では、自国民保護のために輸出を規制するようになっていたことが影響し、日本との関係がギクシャクしていた。

一方で、輸入に頼っていた日本では、食料の自給に奔走する人達が続出していた。

ガソリン車は、今や人々からねたまれる存在になり、自動車業界はいよいよ追い詰められていた。

これまで熱帯にしか存在しなかった昆虫類が、日本にも上陸するようになった。

畜産業界ではメタンガスを削減するために、牛を駆除しようとする動きも出ていた。

二酸化炭素を排出せずにエネルギーを確保する事に関して、政府と市民の間で駆け引きが繰広げられていた。

挙句の果てには、生命維持装置を使って、地球が再び住みよい星になるまで眠ろうと考える人も出てきた。

それでも私達は生き続けなければならなかった。

これは、地球温暖化が原因で、私達が生きている間に本当に起きてしまうかもしれない事例を集めた作品である。

影響2 あきらめる人 それでもあきらめない人

都会に住んでいる会社員クロマツ ユリは、地球の星著「今日から出来る二酸化炭素削減法」という作品を読んでは、懸命に出来ることを実践していた。

家では不要と思われる照明は積極的に消灯し、エアコンの温度も出来るだけ高めに設定していた。

ベランダでは植木鉢をいくつか置いていて、ささやかながらプチトマトなどを栽培していた。

夜更かしは決してせず、また寝る前には家中の家電製品のコンセントを外すなどして、消費電力の削減をしていた。

町内のごみ拾い活動には積極的に参加し、ペットボトルのふたなど、石油に戻すことの出来るプラスチックごみを集めては、工場に持って行き、石油に加工してもらったりもしていた。

ごみ拾い活動以外の時でも、道端を歩いていて空き缶を見つけると、積極的にくずかごに入れたりして、資源のリサイクルに取り組んでいた。

紙は決して無駄遣いせず、裏紙を積極的に使って、可燃ごみを減らしていた。

使い捨ての箸は使わず、自分でマイ箸を持ち歩いたり、さらには間伐等で切られた木の枝を自分で削って箸やつまようじにして、みんなに役立ててもらおうとした。

彼女は二酸化炭素削減に役立つと思われることは、何でも実践していた。

しかし、彼女の積極的な姿勢は、時として衝突を招くこともあった。

夏のある日、ユリは仕事場での冷房の温度を密かに30 にした。そして何食わぬ顔をしながら仕事を続けていた。

しかし30分後、男性の同僚が

「何か暑いと思ったら、冷房30 じゃないか！誰だよ、こんな温度にしたの！」

と言い出し、温度設定を24 に下げてきた。

次の瞬間、職場の人達は一斉に注目した。

「クロマツさん、また君かね。」

「外は40 もあるんだ。こんな日に冷房30 じゃやっていけないぞ。」

「あんたねえ、地球環境もいいけれど、まわりの空気も読んでよ！」
彼女はこれまで何度も勝手に冷房の温度を上げたりしてきたので、まわりの連中はもうお見通しだった。

しかし、ユリも負けずに応戦した。

「確かに暑いという気持ちは分かります。私だって暑いんです。しかし、壁には『これ以上の温暖化を防止するため、夏の間冷房の設定は30 にしましょう。』というポスターがあるじゃないですか。」

しかし、それを主張したところで、まわりの反応は冷たかった。

「今さらそんなの誰も守っている奴なんてどこにもいないよ。」

「やっぱり快適さが一番よ。」

「あんた一人が頑張ったところで、地球が変わるわけなんかじゃない。」

「冷房30 なんて、単なる理想論よ。」

たちまち、彼女のまわりには、あきらめと見て取れる言葉がわいて出てきた。

地球温暖化が行き着くところまで来てしまった以上、この時代では今さら温暖化防止を呼びかけても、もはや焼け石に水の状況だった。

そんなことも手伝って、ユリは職場では一人で浮いてしまい、みんなからジロジロ見られる存在になっていた。

節電など、使用電力のことなどで何か起こると、すぐに彼女の仕業ではないかという憶測が飛び交うようになっていた。

次第に、職場で置かれた状況は厳しいものになっていった。

しかし、自分一人がのけ者にされつつある中で、それでも彼女は自分の意見を貫く覚悟を持っていた。

（それでも私はあきらめないわ。絶対に。私のような嫌われ者がいるから、みんなが多少なりとも環境のことを考えてくれる。そして、地球温暖化を少しでも食い止めるべく、努力をしてくれる。もし私がいなかったら、きっと冷房の温度は22 くらいに下げられていたはず。だから、これから私は主張し続けるわ。）

現に、冷房の温度は2 違うだけで、二酸化炭素排出量は1日につき200グラム以上の差が出るので、彼女の考えも的を得ていた。ユリは職場での異様な雰囲気になら、その日の仕事を終え、家に向かっていった。

しかし帰宅してからも、彼女を待っていたのは、節電意識の高さ故のいざこざだった。

台所に入ってきて、炊飯ジャーと電気ポットの保温が入ればなしになっているのを見るなり、家で留守番をしていた祖父に食って掛かった。

「ちよつとおじいちゃん！昼ご飯が済んだら保温を切つてよ！電気もつたいないじゃないの！」

それを聞いて、彼女の祖父（78）はまたかと言わんばかりに言い返してきた。

「お前、自分の都合で考えすぎじゃないか？保温しておかなかったら、小腹がへつた時にうまい飯が食えんし、お茶を飲みたくなつた時にお湯がない。もっと便利さを考えてくれんか？」

一方のユリも負けてはいなかった。

「おじいちゃん、環境意識ないの？地球温暖化に関しては、おじいちゃんが若い頃から随分言われてきたことでしょ？」

「それはそうだけど。」

「その時から、自分達の便利さばかりを追求してないで、もっと環

境のことを考えて実践すれば、こんなご時勢にはならなかったはずなのに！今の地球がこんな状況になったの、おじいちゃん達のせいだからね！」

「こら！年寄りに向かって、何て事を！」

「そっちこそ地球温暖化をここまで進行させて、償いきれないほどの負の遺産を私達の世代に突きつけたくせに、そんなこと言えるの？」

2人が口げんかをしていると、そこへユリの両親が家に帰ってきた。

彼らも、これまで彼女のやり方を幾度も見てきただけに、状況はすぐに分かった。

「またそんなことでもめているのか。そういうエゴ意識はいい加減にしなさい。」

「地球温暖化を気にするのもいいけれど、わがままは勘弁して。こっちが持たないわよ。」

両親にはユリの気持ちがエゴに見えるのだろう。彼らもうんざりしていた。

「そんなこと言っただって、地球温暖化はもう進むところまで進んでいるのよ！もはや今すぐにでも日本中の全ての人達が、いや、世界中の人達が必死になって温暖化ガス排出を減らしていかないと、もう取り返しのつかないことになるのよ！」

ユリは必死にアピールした。しかし、彼女の懸命な気持ちにもかかわらず、他の3人の反応は冷ややかだった。

「わしらの世代の人間だって地球を破壊するつもりで生活してきたわけではないんだから。」

「もうどうにでもしなさい。そんなに地球の環境が大事だって言うのなら、お前だけ部屋の電気無しで過ごせ！」

「あんたねえ、職場でもそういうようなこと言って、いざこざを起しているんでしょ？そんな性格じゃ、彼氏なんて絶対に出来ませんよ。」

たちまち口々に反論され、返す言葉がなくなってしまったユリは、荷物を抱え、しかめっ面のまま自分の部屋に向かっていった。

ユリが外出中、彼女の部屋の窓は締め切られていたため、自分の部屋に入ると、たちまちサウナのように暑くなった空気が襲い掛かってきた。

夏の間、連日こんな日々が続いていたので、もう慣れていたが、それでもこんな空気をしょっちゅう浴びせられるのは嫌なことだった。

部屋の温度計を見ると、36 を指していた。

「一体いつまでこんな日が続くのかしら。まったく、先代の人達がしっかりと温暖化対策をしていれば、私達の世代がこんな思いをしなくて済んだはずなのに……」

そうつぶやきながら、ユリはエアコン代わりに扇風機のスイッチを入れて、強にあわせた。

そして、部屋の窓を開け、ベランダに出た。

そこには彼女が自主的に栽培しているプチトマトの苗が3つ並んでいた。

彼女は雨が降った日にあらかじめバケツの中に集めておいた水を使って水やりをした。

そして、連日続いている猛暑のせいでどこか元氣のない苗をじっと見つめながら、しばらく考え事をしていた。

間もなく辺りは暗くなってきた、辺りの家の部屋には明かりが灯り始めた。

ユリの両親と祖父も、各自で部屋の電氣をつけ、やることをやっていた。

しかし、ユリだけは部屋の電氣をつけず、懐中電灯を灯しながら地球温暖化防止に関する本をひたすら読んでいた。

この懐中電灯に使っている電池は充電可能なもので、約1000

回繰り返して使えるものだった。

さらに充電器は太陽光で作動するタイプなので、使用時には二酸化炭素を全く排出しないものだった。

彼女はすでに何百回も充電を繰り返しており、これからも使い続ける覚悟を決めていた。

さすがに蛍光灯と比べると部屋は暗いが、それでもこのやり方を変えようとはしなかった。

「みんなに何と言われようと、あきらめない。たとえわずかでも地球を救う方法があるのなら、私はそれにかけてみるわ。インターネットのブログでは、私のように、いや、私以上に地球温暖化防止のために努力している人がいるんだもの。その人達がいる限り、私はあきらめない。絶対に！」

彼女はそうつぶやきながら、孤立無援の寂しさを紛らわし、自分を奮い立たせていた。

影響3 地球最後のホツキョクグマ

連日熱帯夜、さらには最高気温が40 以上を記録した夏がやっと終わり、最高気温がやっと30 くらいになった秋のある日、僕は地球の星動物園にやってきた。

ライオンやゾウなどを順番に見ながら園内を歩き回っているうちに、僕はホツキョクグマのいる場所にやってきた。

暑い夏が相当こたえたのだろうか、動きは鈍く、どこか元気がなさそうに見えた。

それとも、おりの中に1頭しかいなくて寂しいのだろうか。気にしながら歩いていると、このクマについての解説があった。

名前はシキミ。性別はメス。生まれは北極海で、小さい頃に人の手によって救助され、以後この動物園で暮らしています。

数メートル離れたところには、別の解説書が掲示されていた。

ここで飼育されているシキミは、地球上に残ったホツキョクグマの最後の1頭です。

彼女が亡くなれば、ホツキョクグマは絶滅し、永久にこの地上から姿を消すことになります。

その前に、どうか彼女の姿を目に焼き付けておいて下さい。

それを読んで、僕の心は大きく揺さぶられ、次第に申し訳ない気持ちが入り込んできた。

僕達が便利な生活を追い求めたばかりに、このような代償をホツキョクグマをはじめ、たくさんの動植物達に背負わせてしまったからだ。

今から15年前に、地球温暖化のため、北極海の氷はとうとう全て解けてしまった。

そのために、ホッキョクグマは自分達の住む場所を失い、絶滅の危機に陥ってしまった。

そんな時、世界各国の人達が何とか絶滅を阻止したいと立ち上がり、北極海に出向いて、たくさんのホッキョクグマ達を助けあげてきた。

ここにいるシキミもその中の1頭だった。

しかしそれから間もなく、ニュースで助け出された者達をのぞいて、野性のホッキョクグマは絶滅したという報道が流れた。

もう、彼らに戻るべきふるさとはなかった。

これからはホッキョクグマと言えば、動物園のおりの中でしか見ることが出来ない存在となってしまった。

これからはヒトの手によって数を増やしていくしかなかった。

ただでさえ地球温暖化のために、ヒトの分の食料を確保することも大変な状況であったが、動物保護団体の人達は、あらゆる手を尽くし、繁殖のための活動を続けた。

この地球の星動物園でも、何とかして繁殖を成功させようと、オスとメスが2頭ずつ割り当てられ、育てられていた。

しかしこの場所は、夏の気温が40 以上にも達する場所だ。

本来ならば北極に住むべきクマ達がこのような環境の下で生きることとは、過酷なことだった。

その暑さに耐え切れなかったのだらう、1年もしないうちに、オスとメスが1頭ずつ、相次いで亡くなってしまった。

その時、動物保護団体の人達から何とかして数を増やすようと頼まれていた飼育員の人達は、相当残念がっていた。

それでも、その年には、もう一つのペアの間には赤ちゃんが生まれ、一つの希望がわいてきた。

そのクマはオスだったので、幼いメスのクマがいる別の動物園と

連絡を取り、将来的には一緒に住ませようと動き出した。

しかし、そのオスはやはり夏の暑さのために、わずか1年半の短い生涯を閉じてしまった。

飼育員の人達は、誰もが肩を落とし、悲しんだそうだ。

その様子は、ニュースの中でも流されていた。

そして、世界に生息する残りの頭数がだんだん減っていく度に、僕達もその度に悔しい気持ちでいっぱいになった。

その後も何とかして繁殖させようという試みは行われたが、どこもうまくいかなかった。

やはり気候が違いすぎたのだろうか。

プロジェクトが一向に進まない中、地球の星動物園に一緒にいたオスのクマも亡くなってしまい、とうとうこの動物園には、シキミだけになってしまった。

その時、ニュースでは残りの頭数があと1になったことも併せて報道された。

それは、彼女がこの地球上に残された最後のホツキョクグマであることを意味していた。

彼女しかない以上、もう繁殖をする方法はどこにもなかった。

僕達に出来ることは、もはやシキミが1日でも長く生きつづけることを祈るしかなかった。

出来れば永久に生きつづけてほしかった。

もしも不老不死の薬があれば、彼女に投与してみたかった。

道徳違反だということは分かっているけれど、もしもクローン技術によって、動物達を増やすことが出来るのならば、この時ばかりはやってみてみたかった。

しかし、それは所詮、幻想に過ぎないことだった。

いくら願ったところで、もう出来ることは残されていなかった。

それから1年後、ニュースで悲しい知らせが届いた。
来てほしくはなかったが、ついにその日は来てしまった。
その日、日本中が、いや世界中が悲しみに沈み、シキミの死を悼んだ。

次の土曜日、僕はまた地球の星動物園に足を運んだ。
入口には剥製となったシキミが立っていた。

もう2度と動き出すことのないそのクマは、悲しげな表情をしながら、我々人類が犯した、永久に許されることのない罪の重さと、地球温暖化の恐ろしさを訴え続けていた。

影響4 海に沈む国

サッカー観戦が好きな女性 ヘデラ・ヘリックス 24は、この日サッカー・ワールドカップ予選で自分の国、マロン国の選手達を応援しに、アウエーの国、ロータス国にやってきた。

ヘデラはこの国、ロータス国が地球温暖化による影響で国土が水没の危機に瀕しているため、これが最後の予選参加であることはすでに知っていた。

しかし、具体的にどのような状況に置かれているのかまでは、把握していなかった。

彼女は空港の窓口で両替を済ませ、受付の人をお願いして、空港からホテルに向かうタクシーを呼んだ。しかし、その時から現地の人達にただならぬ悲壮感が漂っていることに気がついた。

10分後、タクシーが到着すると、ヘデラは早速乗り込んでいき、運転手の人に宿泊するホテル名を告げた。

彼女は運転手の男性と話しかけながら、気になっていたことを打ち明けた。

「どうしてこの国の人達は、雰囲気がい暗いんですか？」

「分らんかね？この国は地球温暖化による海面上昇のため、近い将来、沈んでしまうんだ。」

「本当に、沈んでしまうんですか？」

「ああ、あと数年もすれば沈んでしまう。もう誰にも止めることは出来ん。すでに多くの人達がこの国に住むことをあきらめ、環境難民となって海外に出て行ってしまうている。私も家族を連れて、どこか別の国に移らなければならん。」

「…行く宛てはあるんですか？」

「現段階では全く立っていない。どこの国に行くのかも全く不透明だ。貯蓄もないし、ただでさえ生活も厳しい状況だ。食料だって海

外からの救援物資に頼っている。こんな時に海外に移住しろなんて無茶を言うにも程がある！だが決めなければならん！」

「そうですか…。」

しゃべりながら次第にきつい口調になっていく運転手の後ろ姿を見つめながら、ヘデラは次第に申し訳ない気持ちに襲われるようになった。

海辺にあるホテルに到着すると、ヘデラは運転手にあいさつしてドアを閉めた。

そしてタクシーが走り去っていくのをじっと見届けると、ホテルに入ってしまった。

入口では、従業員が雑巾で床を拭いていた。

ヘデラは不思議に思い、チェックインを済ませると早速フロントの人に聞いてみた。

「この人達は何故一生懸命床を拭いているんですか？」

すると、フロントの人は神妙な表情で答えた。

「君は5日前に、ここで何があったのか知っているかね？」

「台風ですか？」

「そのとおりだ。」

「でも、あの台風はここをそれていったはずではないですか？それにそんなに大型ではなかったですし…。」

「あの時、海が大しけになった影響で、海水がここまで押し寄せてきたんだ。おかげでフロントは水浸しになった。」

「海岸までは距離があるのにですか？」

「ああ。あんたの住んでいる国では大したことにはならなかっただろうが、海拔の低いこの国では深刻なことなんだ。」

「…そう…ですか…。」

それ以上何も言えなくなったヘデラは、沈んだ表情でフロントの人にあいさつをすると、自分の泊まる部屋に向かって歩いていった。

部屋で荷物を下ろすと、彼女はホテルを出て、外を散歩しに行った。

タクシーに乗っていた時には、運転手と話をしていたせいで気づかなかったのだが、住民達があちこちで地面にマットを敷いて座り込み、お恵み下さいと言いたげな素振りをしていた。

そのうちの一人はヘデラを見かけるなり、彼女のところに近づいてきて、「1クレジット（日本円で大体180円ぐらい）だけでもいいから恵んでください。」と頼み込んできた。

ヘデラは最初、無視して通り過ぎようとしたが、その人の懸命なお願いに押され、ポケットに手を入れ、財布を出そうとした。

しかしまわりに何人も人がいるのを見て、（ここでお金を恵んでしまったら、後から後から手が伸びてきて、大変なことになるかもしれない。）と直感した。

そして慌てて手をポケットから出し、「すみません。」と言いなから頭を下げると、振り返り、来た道を引き返そうとした。

背後からは

「だめなんですか？子供達にせめてビスケットだけでも恵んであげたいだけなのに……」

といった、悲しげな声が聞こえてきた。

ヘデラはそれを聞くと、一瞬どうしようか迷った。

（この国がこんな状況になったのも、元をたどっていけば、私達が地球温暖化を食い止められなかったのが原因のはず。もし私があの人だったら、どんな気持ちなのだろう……）

ヘデラはやろうと思えば、このまま立ち去っていくことも出来た。しかし、善意がそれを許さなかった。

彼女はまた振り返って、その人のところに行くと、財布を取り出し、10クレジット紙幣を取り出した。

そして、その人の前においてある金属の入れ物の中に入れると、追われるようにして一目散にホテルに向かって走り出した。

お金を恵んであげた人がそのあとという行動に出たのかも、全

く把握していない。とにかく、自分の身を守ることしか考えていなかった。

走っている間、彼女は他の人達が自分目がけて襲い掛かってくるのではないかという恐怖感に襲われていた。

ホテルに着くと、彼女はその後、外を歩くことがおっかなくなり、じつと部屋の中に閉じこもりながら過ごしていた。

その日の夕食は、彼女が自分の国から持ってきたカロリーブロックだった。

翌日、ヘデラはホテルのフロントでタクシーをお願いしてサッカースタジアムに行った。

スタジアムに到着すると、早速アウェーサポーター入場口に向かって進んでいった。

しかし、彼女は会場に着いた時から、これまで感じたことのない異様な悲壮感が漂っていることが気になっていた。

やがて試合開始時間が近づき、両国の選手達がピッチに姿を現した。

すると、ホームのサポーター達が次々と横断幕を出してきた。

そこには彼らの正直な気持ちを表現されていた。

「絶対に行こう！ロータス国最後のワールドカップの舞台へ！」

「国土水没前に、最高の思い出を残していこう！」

そのメッセージを見て、ヘデラはますます申し訳ない気持ちでいっぱいになってきた。

（もしも今願いが叶うのであれば、地球温暖化を食い止めたい。そしてこの国の水没の危機を救いたい。もう、手遅れなのはわかっているけれど、でも…。）

彼女はロータス国の人々に思わず同情を寄せたが、それでも次の瞬間には自国の選手達に向かって、出せる限りの大きな声を出し始めた。

そして、いよいよ試合開始となった。

ロータス国の代表は、この試合でマロン国に負けたら、その時点でワールドカップ出場の夢が永久に消え去ってしまう状況になっていたため、出だしから悔いを残すまいと必死に攻め上がってきた。そのために何度かゴールを脅かされるシーンがあったが、実力で上回るマロン国の代表選手達は冷静に対処し、ゴールを死守した。その後は、じっくりと冷静に機会をうかがった後、相手の隙をついて反撃に出た。

そして、前半16分と20分に立て続けにゴールを決め、前半を2対0で折り返した。

後半になっても流れは変わらず、マロン国の代表選手達は相手ゴールに次々とシュートを浴びせ、後半12分に3点目のゴールが決まった。

もはやこの時点で勝負あったと思われる状況だったが、それでもロータス国の代表選手達は足がつっても死に物狂いで走り続けた。

もはやこの試合で死を覚悟するぐらいの、そんな闘志さえ感じられた。

そんな気持ちにマロン国の選手達は圧倒されたのだろう、後半4分、相手に一瞬の隙をつかれて、独走を許し、1点を返された。

ロータス国の選手達はボールを拾い上げると、一目散にセンターサークル目がけて走り出し、試合を再開させた。

彼らの国は、引き分けならば首の皮1枚つなげるだけに、もはや極度の疲労で動かないはずの体を無理やりに動かしながらゴールに襲い掛かってきた。

その勢いに押されたのだろう。マロン国の選手がペナルティーエリア内でハンドを犯し、PKを献上してしまった。

そしてPKを決められ、後半ロスタイムに入った時には、スコアは3対2になっていた。

こうなってはスタジアム内のロータス国のサポーター達は、全員

が出せる限りの大声を出し続けて、選手達を後押ししていた。

その迫力に、ヘデラ達は足がすくみ、恐怖感を感じながら試合を見守っていた。

しかし、その迫力もそこまでだった。

結局試合は3対2のままタイムアップしてしまった。

この瞬間、ロータス国の最後のワールドカップ出場の夢は、消えた。

最後まで同点、逆転を信じて死に物狂いで応援し続けていたサポーター達は、泣きながら崩れ落ちるようにして椅子にへたり込んでしまった。

その光景はヘデラにとっても胸の痛いものであった。

（ごめんね。本当は私だって、あなた達に勝たせてあげたかった…。水没してしまう前に、あなたの国をワールドカップに出させて、最高の思い出を作らせてあげたかった…。でも…。これは勝負だから…。）

そう思っていると、サポーター達が次々と横断幕を出してきた。

そこには次のようなことが書かれていた。

「私達は、サッカー代表が永久に見られなくなっても、その勇姿を決して忘れない！」

「この国で生きた誇りを、いつまでも語り継ごう！」

「みんなが別々の国に別れて住むことになっても、心はいつまでも一緒にいよう！」

「今まで感動をありがとう！」

スタンドのサポーター達は、みんな泣いていた。

彼らだけではない。ヘデラ達も、ピッチ上にいる選手達も、みんな泣いていた。

地球温暖化のために、国が消滅してしまう。

今は近所に住んでいる人達も、これからは遠く離れた土地に離れていってしまう。

そうだったら、もう2度と会えなくなるかもしれない。

さらには、この予選が終わったら、サッカー代表は解散し、選手達はこれから別の国の代表選手を目指していくことになってしまう。スタジアムにいるサポーター達も、これからは自分の国を捨てて、各自で移住していった国を応援することになってしまう。

彼らはこれから先、そんな重い現実が待ち構えている。

でもせめて、今だけはそんな気持ちを忘れようと、スタジアムにいる誰もがピッチ上にいる両チームの選手達の健闘を称えていた。

誰もが精一杯の声援を送り、拍手を送っていた。

5年後、ロータス国は、世界地図から永久に姿を消した。

影響5 プロ野球ストライキ突入

この時代のプロ野球では、地球温暖化防止のためのプロジェクトとして、使う電力をこれまで以上に減らしていく取り組みがいくつも行われていた。

この年のシーズンオフ、プロ野球のオーナー会議では、来季の日程や試合におけるルールなどを取り決めるための話し合いが行われていた。

時間をかけてじっくりと議論された結果、次のようなことが取り決められた。

- ・消費電力を今まで以上に削減するため、来季は基本的に平日でもデーゲームで試合を行うことを推奨し、土日、祝日には一切ナイトゲームを行わないものとする。
- ・やむを得ずナイトゲームを行う場合、あらかじめ本オーナー会議によって決められた電力量を超えないように試合をしなければならぬ。
- ・ナイトゲームを行っている時に使用電力量が超過した場合、その時点で試合を終了とする。
- ・試合時間は9イニング2時間15分を目標に行う。
- ・9回に到達する以前の状態でも、試合時間が2時間45分を超える場合は新しいイニングには入らないものとする。
- ・試合時間2時間15分を越えることが確実な時に、ワンポイントリリーフなど、時間のかかる行為を行った場合はそのチームに罰金を科す。
- ・来季から基本的に延長戦を行わず、9回終了時点で同点の場合は引き分けとする。
- ・来季から各リーグ共に前期・後期制を採用し、酷暑の時期に試合を行わないものとする。

前期：4月1日～6月20日（60試合を予定）

後期：9月11日～11月30日（60試合を予定）

12月上旬に各リーグの前期優勝チームと後期優勝チームがプレーオフを行い、それぞれの勝者が12月中旬に日本シリーズを行う。ドーム球場で試合を行う場合、デーゲームの時間帯であっても、ナイトゲームと同じ規則に従わなければならない。（ドーム球場では、デーゲームであっても照明等で大量の電気を消費するため。）

21世紀初頭では考えられないようなルールが、このオーナー会議によって取り決められようとしていた。

いや、むしろ、こうでもしなければならぬような状況になっていた。

全ては先代の残した負の遺産である、深刻なまでの地球温暖化問題をこれ以上悪化させないようにするための苦肉の策だった。

しかし、それから間もなく、選手やファンから反発が起きたため、ある日、選手側と組織委員会側で話し合いが行われることになった。その中で組織委員長であるツバキ氏と、選手会長であるサカキ選手は、会議室でお互いの意見をぶつけ合った。

「こういうわけだ。きつい提案かもしれないが、何とかしてこちらの要求を受け入れてほしい。」

「この内容には納得出来ません。来季は今までよりもっと削減しろと言っんですか？」

「そのとおりだ。今や日本はこうでもしなければならぬ状態なんだからな。」

「こちらだってプレーに支障のない範囲内でしたら、これまで出来る限り協力をしてきました。しかしここまでやられたら、いちいち時間を気にしながら試合をしなければならぬではないですか。」

「こちらだって環境省から使用する電力を減らすように通達を受けたからこそ、このような決定をしたんだ。やりたくてやっているわ

けではない。せめて協力をお願いしたい。」

「酷暑を避けるために夏季に約3ヶ月の間プロ野球を中断するとなれば、その間何をしていればいいんですか？」

「申し訳ないが、それはまだ未定だ。」

「ちよつと待つてください！未定つてどういことですか？」

「まあ、息抜きにはちよつどいいだろう。オフだと思つて過ごしてくれないか。」

「そんなこと言われても、どう過ごせばいいんですか？ドームもこれまで以上に使いにくくなるし、選手にとっては踏んだり蹴ったりですよ！」

「こつちだつて、選手の気持ちも一生懸命考えたんだ！だがしょうがないだろ！こついったご時勢になつてしまつたんだから！」

お互いの意見をぶつけていくうちに、段々言い方が感情的になつてきてしまつた。

そのため、双方共に一旦会話をやめ、しばらく別室でお茶を飲みながら息抜きをすることになった。

30分後、気を取り直した双方の人達は、再び会議室に集まり、議論を始めた。

今度はサカキ選手から意見を言い始めた。

「平日でデーゲームでは多くのお客さんが来られないではないですか。」

「そうなるのは覚悟の上だ。これに関してはファンの皆様に妥協してもらうしかない。」

「こんな要求、もし選手達は納得出来たとしても、ファンの人達は納得してくれるでしょうか。僕がファンだったら反対の署名を起しますよ。」

「だが他の国では、平日でもデーゲームを行っているチームがある。それでもお客は結構入っているんだ。我が国でも出来ると思ふんだが…。」

（現在、メジャーリーグでは、カブスが平日でもデーゲームをしています。）

「そう言われても、こちらとしてはただ真似をしているようにしか思えないんですが……。」

「真似と言われようが、何と言われようが、こちらとしては、とにかくやることはやっていく方針で考えている。何としても受け入れてほしい。」

「……。」

サカキ選手をはじめ、選手一同は考え続けた。

しばらくの間、会議室には異様なまでの雰囲気が漂い続けた。

選手達は小声でどうするか相談していたが、やがてサカキ選手が口を開いた。

「これに関しては、今すぐこの場で決断出来ることはありません。少しまた時間をくれませんか？」

委員会側もそれを聞いて、要求を承諾した。

選手達はそれを見ると、また別室へと移動して行った。

それから1時間後、選手達は再び会議室に戻ってきて、その間にあったことを話し始めた。

「球団の選手達と電話で色々連絡を取ってきましたが、彼らもこの要求は受け入れられないとの返答でした。全部でなくてもいいので、平日はナイトゲームも取り入れるなど、何とかファンの人達の気持ちを考慮した上で、もう一度考え直してもらえませんか？」

「それは出来ん。平日でもやはり太陽の光の下で試合をしてもらい、使用電力を減らしてもらわなければならない。それに試合時間を制限することにも協力してもらわなければ。」

「でも……！」

双方の代表者はその後も30分の間、意見を述べ続けた。

しかし、どこまで時間をかけても、考えは噛み合わないままだっ

た。

そうしているうちに、やがて選手の側からは最後の手段を行使する動きが出てきた。

「…これだけ、話し合ってもだめなら…、仕方ありません…。こんなことを言うのは心外ですが…、取るべき手段を取らせていただくかと思えます…。」

サカキ選手は苦悩に満ちた表情を浮かべながら、いよいよ最後の手段に踏み切る覚悟を決めた。

その日の夜、テレビ番組の最中に、突然ニュース速報が流れた。

視聴者達は（何だろう？）と思いながら画面を見ていると、数秒後に速報の内容が表示された。

「本日、プロ野球の会議で、選手側から1週間後にストライキが行われることが発表されました。」

その内容を見た野球ファンは驚き、間もなく組織委員会や各球団には問い合わせが相次いで、たちまちてんやわんやの状態になってしまった。

このゴタゴタはその後も続き、結果的にこの年は結局日本シリーズ開催中止の事態にまで発展してしまった。

二酸化炭素の削減と引き換えに、プロ野球はこれから一体どうなってしまうのだろうか…。

影響6 悪化する外国との関係

日本から交換留学生として、外国に住んでいる18歳の少年クスノキ マンサクは、ある日母国にいるガールフレンドに手紙を書いた。

そこには地球温暖化による様々な影響や、その状況下における彼自身の心の内がつづられていた。

サクラ、日本で元気に過ごしていますか？

そちらの夏は、日中の最高気温が40 以上になる超猛暑日を何日も記録したそうで大変だったそうですね。

この手紙を書く前にインターネットでそちらの天気をチェックしましたが、10月になった今でも最高気温が30 を超えているそうです。

地球温暖化のせいで、大変な世の中になってしまいましたね。

さて、こちらの生活ですが、やはりこちらも暑くて大変です。

近くに生えている草木は地球温暖化による異常気象のために、全体的に以前よりも勢いが衰えていますし、今年の小麦の生育具合も良くはないそうです。

品質は以前よりも落ちていることは間違いないでしょうし、恐らく高い値段で売れることは無理だと思います。

それでも食べていけるだけ幸せだと思わなければなりません。

この国は、以前は世界各地に食料を輸出していましたが、さすがにこのご時勢では自国民を養うのに精一杯の状況で、輸出までは手が回らないのが現状です。

日本からは「食料の緊急輸入を！」という声が上がっており、こ

の国に対する抗議活動も起こっていると思います。
そのせいで、この国との関係は非常にギクシャクしていると思います。

こちらでも、不穏な空気が漂っています。

先日は「お前達日本人にくれてやる食料はない！」とか「食料は自分達で作れ！」「輸入なんかにはいつまでも頼っているからこうなるんだ！」というような声も浴びせられました。

はつきり言って悔しかったです。

しかし、何も言い返せない自分に対しても悔しさがこみ上げてきました。

日本は、以前は世界的に見てもかなり豊かな国だったのですが、食料自給率が低いというもう一面もありました。

そのもろさが、今やまともに暗い影を落とす状況になってしまいました。

それでも、日本は第二次世界大戦によってすっかり荒廃してしまった状況からはい上がってきたという過去もあります。

せめてその時のような状況をもう一度再現し、世界の人達から「奇跡だ！」と言われるような状況を、自分達の手で作り出してみたいと思っています。

国と国の関係が悪いこともあって、本気で日本に帰りたいと思うこともあります。

僕は今、機械工学を勉強しながら、みんなの役に立つ機械を作る研究に没頭しています。

これが食料増産のために頑張っている人達の役に立てばと思っています。

僕は自分なりに目標を持って、毎日を元気に過ごしています。
どうかサクラも体に気をつけて過ごしてください。

ク ス ノ キ マ ン サ ク
2 0 × × 年 1 0 月 1 0 日

影響7 食料の確保

先日マンサクのガールフレンド、サクラ（18歳）のもとに手紙が届いた。

彼女は自分の部屋に行くと、早速封筒を開けて手紙を読んだ。

マンサクが苦勞しながらも、懸命に頑張つて過ごしていることは、彼女にも伝わってきた。

サクラは一通り読み終えたと、早速紙とシャープペンシルを取り出し、返事を書き始めた。

マンサク、手紙ありがとう。

外国での暮らしは色々大変でしょうね。

マツ君が手紙で書いたとおり、こちらは10月のはじめ頃まで最高気温が30 を超えていましたよ。

さすがにこの時期になると、気温は28 くらいまでとなりましたけどね。

今年は地球温暖化のせいで、太平洋上には超大型化した台風がいくつも発生しました。

もしその台風が、勢力を保ったまま日本を襲ったら、家や農作物は壊滅的な打撃を受け、交通は寸断され、人々は大混乱に陥ると思つたのでハラハラしましたが、今回はどうにかまぬがれたようです。私自身、少しほっとしています。

しかし、台風シーズンはまだ続いているので決して油断は出来ません。

今日本では空き地があれば積極的に農地にして、少しでもたくさん食料を確保しようとする動きがあちこちであります。

この前は、3 m × 3 mの広さしかない場所を耕している人もいました。

もしかしたら土のグラウンドの野球場も、状況によっては畑になってしまいかもかもしれません。

そうだったのも、マツ君が言っていたとおり、外国から輸入される食料がどんどん減ってきて、このままでは餓死者を出してしまうという危機感が出てきたからです。

ニユースを見ていると、政府は与党も野党も「もう外国を当てにするわけにはいかない。我々の国民は我々の手で養っていかねければ。」と口をそろえて言っています。

考え方の違いはあっても、こういうことに関しては共有出来るものなんです。

ただ、品質はというと、お世辞にもいいとまでは言えません。

スーパーでは傷物の野菜が売られていたりもしますし、米も一粒一粒をよく見ると、大きさがまちまちです。

質が良くなければ、それは当然値段にも響いてくるわけで、農家の人達は悲鳴を上げながら頑張っているのが現状です。

夏、40 を越える暑さと必死に闘い、熱中症による犠牲者を出しながらも、彼らは死に物狂いで頑張っています。

それでも、豪雨や台風が来て辺りが水浸しになったら、彼らのこれまでの苦労は一瞬で無駄になってしまいます。

以前もニユースで、洪水のために手塩にかけて育てていた作物がみんな流されてしまい、涙を流しながらインタビューに答えている人の映像を見ました。

とても心が痛みましたよ。

政府の統計によると、今日本国内で栽培されている農作物は、理論上収穫出来る量を100とした場合、実際に収穫出来ている量は大体70くらいだそうです。

その理由は、日照りや洪水、台風や病気などのために3割ぐらい

が収穫までこぎつけられないからだそうです。

都市によっては収穫ゼロというところもあるそうです。

そんな状況を少しでも何とかしたいということで、私が通っている高校でも、今年の運動部の夏の大会が終わってから、運動場を農地にしようという提案が出されました。

最初は（冗談でしょ？）と思い、耳を疑いましたが、地域の人達のために出来ることをやりたいという生徒会からの強い希望で、実行されることになりました。

今では運動場の大体3分の1くらいが畑に姿を変え、ジャガイモやサツマイモ、ダイズなどが成長しています。

日本史の時間で習ったことですが、100年以上前の戦時中では、このような光景が随所に見られたそうです。

当時のことを知っている人はもう日本中どこを探してもいないので、あくまでも想像ですが、その時の人達の気持ちがどこか分かるような気がします。

マツ君は現地の人々に嫌がらせを受けたりして、悔しい思いをすることがあると思いますが、こちらでもそのようなことはあります。日本人と、日本に住んでいる外国人との間で犯罪やいざこざなどは結構起こりますし、心無い言葉の浴びせ合いもあります。

私も街を歩いていると、時々耳にします。

温暖化による影響というのは、地球環境だけでなく、人間関係にも暗い影を落とすものなんです。

だけど、私はみんなと仲良く接していますし、今のところ私が外国人から嫌がらせを受けたことはないのです、私のことは心配しないで下さい。

本当に大変な世の中になってしまいましたけれど、お互いががんばろうね。

辛くなったら、いつでも帰って来ていいよ。
フアイト！

サクラより

影響8 行き詰る車社会

今から50年以上前の日本は、世界屈指の豊かな国という存在だった。

しかしその一方で、石油を大量に消費し、二酸化炭素排出量の上位にランクインする国だったことで、他国から批判を受けたりしたことがあった。

また石油がもし枯渇したら、この国はどうなってしまうのかという不安も国民の間には常につきまとうていた。

それでも21世紀前半の段階では、まだ危機感がそれ程ではなかったため、国民は化石燃料を使い続ける時期が続いた。

しかしこの時代になって、それまで石油を使いに使って、二酸化炭素をたくさん排出してきたツケがとうとう出てきてしまった。

今、世界では石油の枯渇が深刻な問題になっていた。

さらに日本では、石油は二酸化炭素排出の元凶だとか、地球温暖化の犯人だと揶揄され、すっかり国民の間で嫌われる存在になっていた。

その現実とは、かつて栄華を誇っていた日本の車社会にも深刻な陰を落としていた。

21世紀後半のこの時代では、ガソリン自動車は既に生産中止となっていた。

残されたガソリン自動車も時代遅れの代物と揶揄されて年々台数が減少していき、あと10年もすれば日本から消えてしまうかもしれないと言われていた。

今、自動車と言えばハイブリッドカーが主流となっていた。

これまで電気自動車や、水素燃料車、ソーラーカーなど、二酸化炭素排出を押さえる車の開発は色々行われてきたのだが、結局地球温暖化問題を打破する、革命的なものまでは結局現れなかった。

結局どの車においても、生産台数は年々減少し、どの業界も非常に厳しい状況に置かれていた。

ある企業はもう既に倒産してしまい、人々の記憶からはその会社の名前すらも薄れていた。

残った企業も、合併などを繰り返しながらどうにか生き残っている状況だった。

そんなご時勢の中で、燃料の製造の仕事をしている技術者のナツメは、ゴールドンウィークを利用して、高校生の弟マサキと一緒に車で旅行に出かけた。

彼らの車はもちろんハイブリッドカーだった。

運転はナツメが担当していた。

途中、2人は高速道路に入り、どこまでも続く道を眺めながら会話をしていた。

「姉ちゃん、さつきから全然対向車とすれ違わないね。」

「…そうね。お父さんとお母さんがまだ若かった頃はもっと車がたくさんあったのにね。」

「どうして車がこんなに廃れちゃったんだろうね。」

「それはね、地球温暖化のためよ。私達が車などで輩出してきた二酸化炭素のせいで、ガソリン車が批判を浴びて、生産中止に追い込まれてしまったの。」

「じゃあ、この車がもし壊れたら、修理してもらえるかな？」

「今だったら、まだガソリンスタンドで修理してもらえと思うわ。でも、そのガソリンスタンドの数も減っているから、これからどうなるのか…。」

「ところで姉ちゃん。今、ガソリンなんてほとんど売ってないのに、どうして『ガソリン』スタンドって言うの？」

「それは…、昔の名残じゃないかしら。お父さんとお母さんが若かったことは、そこではガソリンを主に販売していて、1リットル100円未満という価格で販売していたくらいだから。」

「100円未満??」

「そう。今じゃとても考えられないことだけど、本当のことよ。」
マサキは信じられないという表情を浮かべたまま、しばらく呆然としていた。

2人がこのような会話を交わすのも無理はなかった。

と言うのも、この時代、ガソリンスタンドと言えば、50年前とは意味合いがかなり違っていたからだ。

そこでは稲わら、雑草などを原料にして製造したエタノール燃料、水と一酸化炭素を原料として作られたメタノール燃料、さらには電気自動車を充電するためのプラグや、燃料電池自動車用の液体水素が設けられていた。

もちろんガソリンも一部店舗ではまだ細々と販売していることはしているのだが、そもそも世界における石油の生産量自体がかなり落ち込んでおり、そのせいで流通しているガソリンの量がかなり減少していた。

いつしかガソリンは昔のように大量に消費出来る時代ではなくなってしまう、すっかり貴重品となっていた。

「このハイブリッドカーも、もう寿命はそんなに長くはないわね。ガソリンと電気を両方使って走るとは言え、やっぱりガソリンを使うんだから。」

「ガソリンを扱っているところって、あとどれくらい先なんだろうね。」

「多分、200kmくらい先になるかもしれないわ。」

「そんなに?」

「仕方ないじゃない。もう日本国内にはあまり流通してないんだから。過去の人達はね、地球が100万年かけて作り出した化石燃料を、たった1年で消費していたくらいなんだもの。それを考えれば、ガソリンの原料となる化石燃料が枯渇してもおかしくないわ。」

「…何だか、昔の人達にちょっとジェラシー感じてきた。その時代

の人達ばかり使えるだけ使って豊かに過ごして、地球を温暖化させ
といて、おれ達の世代にはこんな大変な思いをさせるなんて…。」

「悪気はなかったとは思っただけ、ただ…。」

「ただ？」

「その時代の人達にもう少し温暖化防止のための努力をしてほしか
ったわね。努力して、エコになることにもっと積極的に取り組んで、
そして私達の世代にバトンタッチしてほしいかったわね。」

「じゃあ、姉ちゃんもジェラシー感じているの？」

「感じてくはないわ。でももう起きてしまったことはしょうがな
いじゃない。とにかく、たとえ手遅れだと言われようと、私達は私
達に出来ることを実践していくしかないんだもの。」

「…。」

マサキはすっかり衰退してきた車社会の現状についてしゃべった
後、今度は道路の路面をじっと見つめ出した。

彼らが走っている高速道路は自動車社会の衰えを象徴しているか
のように、ガードレールがさび付いていたり、橋に差し掛かる時の
つなぎ目部分では段差が出来ていたりしていた。

また、アスファルトには至るところにくぼみやひび割れが出来て
いた。

そのため、あまりスピードを出して運転していると危険というこ
とで、最高速度は日本全国で、平常時は70 km/h、雨の日など
は50 km/hに制限されてしまう状況だった。

車を通らない路肩には、ひび割れから草がいくつも顔をのぞかせ
ていた。

しかし、そのような状況になっても、道路が補修される見通しは
依然として立っていないかった。

なぜなら、原油の不足により、アスファルトまでも不足してしま
ったからだ。

「何か危なっかしい道路だな。果たして地震が来たら大丈夫なのか

なあ…。」

「どうかしら…。おそらく震度5強か、6弱くらいの地震が来たら、この高速道路は倒壊してしまうかもしれないわね。」

「そんなことになったら、直せるのかなあ？」

「分からないわ。道路を直すための材料がそろわないかもしれないし、そろったとしても、国にそんな予算があるのかどうか…。」

「どうなったら、車社会、もう終わりじゃないか！」

「…。」

思わず興奮してしまったマサキの愚痴を聞きながら、ナツメは黙ったままじつと前を向いて運転を続けていた。

それから30分の間、ナツメは目的地に向かって運転を続けた。

しかし、その間に対向車線をすれ違っていた車はわずか20台程度に過ぎなかった。

これでは道路公団などは到底採算など取れないであろうことは誰の目にも明らかだった。

恐らく、もし本当に大きな地震が来たら、被害を受けた区間は間違いなく無期限の通行止めになるであろう。

もちろん2人の脳裏にもそのようなことがつきまとっていた。

「車…、なかなか来ないね。」

「そうね…。」

2人はすっかりさびれた高速道路の上をひたすらドライブしていた。

影響9 新たな伝染病

こんばんは、7時になりました。ニュースの時間です。

今夜は、まず最初に新たな伝染病に関するニュースをお伝えします。

かつて、熱帯、亜熱帯地方にしかいなかった昆虫類が、地球温暖化のために、今や日本の至るところで見られるようになりました。

この中には、伝染病を媒介する昆虫もいるため、国内では新たな病気が広まる可能性が高く、専門家は注意を呼びかけています。

今、昆虫類を取り扱っている研究施設と中継がつながっています。研究施設にいます、イヌマキさんどうぞ。

はい、イヌマキです。

私は今、昆虫類を採取している研究室に来了います。

こちらの実験机の上には、10枚程度のシャーレが並んでいて、中には昆虫の標本が入っています。

私の隣には、昆虫の専門家で、この施設の所長をつとめております、イチイ教授にきていただけております。

イチイさん、よろしくお願ひします。

よろしくお願ひします。

それにしても、本当にこれらはかつて日本にいなかったものばかりなんですか？

はい。おっしゃるとおりです。50年前には赤道に近い熱帯地方か、またはそのまわりの亜熱帯地方にしかおりませんでした。しかし、地球温暖化の進行に伴って、次第に北上し日本に到達しました。

そして、日本の気候にも順応出来るように進化したものが増殖していき、今のような状況になったと考えられます。

この昆虫の中には伝染病を媒介するものがあると聞きましたが、それはどれですか？

いくつかありますが、今私達が最も警戒しなければならないものが、こちらのハマダラカと呼ばれる蚊です。

この小さな蚊は、マラリアという病気を媒介するマラリア原虫を保有しております。

マラリア原虫はヒトの体内に入ると、赤血球中で増殖していきま

す。
一旦病気を発症すると40 近くの高熱に襲われ、死に至ることもあります。

病気を防ぐ方法はあるんですか？

まず、蚊に刺されないようにすることが大切です。そのためには虫除けスプレーや蚊取り線香などを使用することが有効です。

もし発症してしまった場合、薬はあるんですか？

薬としては、キナの樹皮に含まれるキニーネなどがあります。

しかし、日本国内では手に入りにくいいため、海外から輸入するしかないのが現状です。

また、そのような薬を持っている国も、現段階では自国民を保護するために輸出に関しては消極的な姿勢を見せています。

仮に輸出を許可した場合でも、日本で買うとなれば保険が適用されないため、かなり値段が高くなることが予想されます。

結局、病気になってから治療するよりも、病気にならないように、

事前に予防策をとるのが得策と言えます。

テレビをご覧の皆さんも、この黄色っぽい蚊を見かけたら、ぜひ注意をしてください。

また、他にも病気を媒介する昆虫はいますので、今まで見たことのないものを見かけたら、注意をお願いします。

分かりました。イチイさん、今日はお忙しい中、わざわざありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。

それではスタジオにお返しします。

はい、スタジオです。

地球温暖化による影響は、このような形で現れています。

すでに手遅れだと言う声も聞かれておりますが、それでも私達は少しでもこれ以上の温暖化を食い止めるべく、さらなる省エネなどの努力をしていかなければなりません。

では、次のニュースです。

影響10 苦悩する酪農家

二酸化炭素排出による地球温暖化問題が深刻化する中、その他の温室効果ガスについても問題が浮上していた。

その影響はとある国の酪農家が飼っている牛にも及んでいた。

牛は食べた草を消化する時、体内にいるメタン細菌によってメタンが生成し、牛がゲップをするとそれが大気中に放出されるということが知られていた。

メタンは二酸化炭素の約21倍の温室効果を持つと言われているため、二酸化炭素と並んで大きな問題となっていた。

その国ではゲップに含まれているメタンを減らすために、様々な研究が行われてきたが、今のところ抜本的な解決には至っていないかった。

そんな中で、これまで30年以上酪農を営んでいる農家バンクシア・プラタナスは、ある日の新聞記事を見て驚いた。

そこには次のようなことが書かれていた。

今日、酪農委員会は牛のゲップに含まれるメタンの量を抑制するため、来年から酪農家に対し、メタン細菌を減らすための物質を使用することを義務付け、メタンの排出量をこれまでの2分に1以下に減らす方針を発表した。

もし、酪農家が半年以内にこれを達成出来ない場合には補償金を支払い、1年たっても達成出来なければ、牛の数の調整に乗り出す計画である。

さらに委員会は、このやり方が地球温暖化に歯止めをかけるために一役買うことを期待しているというようなことを記事の中で言っていた。

しかし一方のバンクシアはこのやり方に不信感を抱かずにはいれなかった。

「一体委員会はこれから何をするつもりなんだ。今メディアで紹介されているとは言え、メタン細菌を減らす物質は現時点では高価だ。ただでさえ採算ぎりぎりで行っているのに、こんなことを義務化されたら間違いなく赤字経営になってしまう。それに、牛の数の調整とはどういうことなんだ？まさか…。」

悪い予感がしたバンクシアは早速、委員会の電話番号を調べ、連絡を取ることにした。

最初はなかなかつながらなかったが、辛抱強く電話をかけるうちに、やっとつながった。

『酪農委員会です。ご用件は？』

「ハロー、こちらは酪農家のバンクシア・プラタナスです。」

『あなたも酪農牛についてのご質問ですか？』

電話に対応した人は、すでに何人もの人達から質問攻めにあつてきたのだろう、少しうんざりしたような口調で答えてきた。

一方のバンクシアは内容について詳しく知るために食い下がってきた。

しかし応対した人は、どこかはぐらかしたような言い方を繰り返すばかりでなかなか具体的な内容について言おうとしなかった。

そうしているうちに、バンクシアにはイライラがつのり、強い口調で「牛の数を減らすということは、すなわち牛を殺してメタンを減らすというつもりなんだろ？」と言い放った。

その言い方に応対した人も緊張の糸が切れたのだろう、逆ギレするように「ああ、そのとおりだ！地球温暖化防止に貢献出来ないのなら覚悟しろ！こっちは朝からこんな電話ばかりで腹立っているんだ！」と言い返してきた。

このやり方にはバンクシアもさすがに耐え切れなくなり、「覚えてろ！訴えてやるからな！」と捨てゼリフを残して、受話器を思い切り叩きつけて電話を切った。

その大声を聞いて驚いたのだろう、妻がやってきた。

「一体なんですか？そんなことをして。」

「大声を出してすまなかった。しかし、このままでは酪農家は大変な状況になってしまふ。」 バンクシアはそう言って謝ると、新聞の記事と電話で言われたことについて話した。

「あなた、他の酪農家の人達を集めて抗議をしましょうよ。」

「そうだな」。地球温暖化を食い止めたいばかりに、こんなことをされたら、酪農家に生活をやめろといっているようなものだからな。

「

2人は早速知り合いの酪農家達に電話をかけた。

電話に出た酪農家も、多くの人達はすでに情報を得ていたのだろう、彼らもすぐに賛同してくれた。

そして抗議活動をしようという意見が出始めた。

バンクシアもそれに賛同し、早速仲間の酪農家達に呼びかけを開始した。

それから1週間後、多くの酪農家の人達や、彼らの呼びかけで集まった一般の人達が抗議デモを実行した。

彼らは「私達の生活を守れ！」「酪農家をつぶすな！」「政策を撤回しろ！」というプラカードや横断幕を掲げ、酪農委員会の建物の前に押しかけていた。

一方の酪農委員会は、警察を呼んでデモを鎮圧しようとしたが、まずは代表者同士で話をしようということになり、代表者であるバンクシアを呼び、建物の中に招いた。

バンクシアは、まず政策の撤回を求める署名を調査委員会の代表に渡すと、早速酪農家側の主張について色々と説明をした。

「地球温暖化が世界中で深刻な問題になっていることは私達も知っています。その温暖化の原因となるメタンを減らしたいというそちらの気持ちも分かります。私達も出来るだけのことはしています。」

しかし、あなた達のやり方では、私達酪農家は生活が出来なくなっています。どうか撤回してもらえませんか？」

しかし、委員会側も食い下がらなかった。

「いいですか？地球温暖化というのはあなた達が考えている以上に今や深刻な状況なのです。本当なら今すぐにもメタン排出量を2分の1以下にしてみたいところなのですが、私達はあなた達の生活について配慮したからこそ、罰金まで半年、そして間引き開始まで1年の猶予を与えたのです。これはぜひとも守ってもらわなければ困ります。」

「かといって、これでは多くの酪農家が廃業に追い込まれてしまいます。あなた達は牛肉が食べられなくなってもいいのですか？牛乳が飲めなくなってもいいのですか？」

「確かにこれからはそれらを手に入れにくくなるでしょう。しかし、温暖化防止に貢献出来ないのであれば、そのような酪農家は潔く手を引くべきです。今すぐにでもそうしなければ、地球はもはや取り返しのつかない状況なのです。」

双方は、その後も色々と主張を続けたままお互い譲らず、結局平行線のままだった。

意見を聞き入れてもらえず、政策を撤回してもらえなかった酪農家達は、その後も建物の前に居座っていたが、警察が威嚇してくると、仕方なくデモ隊を解散し、重い足取りで引き上げていった。

しかし、彼らは政策の撤回をあきらめてはいなかった。

もはや話し合いでは解決出来ないと判断すると、ついに裁判所に訴えることを決意した。

ただ、もし裁判で半年以上が経過して原告側が敗訴すれば、酪農家達には罰金が課せられ、1年以上が経過して敗訴すれば、牛達が犠牲になってしまう。

彼らにとっては絶対に負けられない闘いが幕を開けた。

影響 11 エネルギー問題

今日本では、化石燃料に代わるエネルギーの確保が大きな課題となっていた。

日本は21世紀初頭、京都議定書での約束を果たせなかった。

さらには2050年までに二酸化炭素排出量を半分以上にすると
いう目標も、結局夢物語に終わってしまった。

しかしそのような状態になっても、日本国民一人あたりの二酸化炭素排出量は依然高いままの状態を維持していた。

そんなある日、政府は何とかして国民が必要としているエネルギーを確保するために、ホームページを通じて次のような発表をした。
「これから地球温暖化を防止しながらエネルギーを確保するためには、植物を有効活用するのが一番だと思います。植物は光合成によって二酸化炭素を吸収し、私達はそれを木炭やバイオエタノールとして利用します。そのため、地下に長いこと埋もれたままになっていた化石燃料とは違い、二酸化炭素は増えない計算になります。」

しかし、それから間もなく、ホームページのご意見欄にはその発表に反論する意見が書き込まれた。

「そんなことをしてむやみに植物を使ったら、自然が破壊され、災害によって我々の生活が脅かされ、さらには地球温暖化をさらに進行させる原因になってしまうではないですか！」

「植物から作ったとはいえ、燃料に加工する段階でエネルギーを使うじゃないですか！」

「植物由来のグルコース180gを発酵させてバイオエタノールを作ると、二酸化炭素は88gも排出されるんですよ！」

参考までに： $C_6H_{12}O_6$ （分子量180） $\rightarrow 2C_2H_5OH$

(分子量 2×46) + 2CO_2 (分子量 2×44) となります。

それから数日後、政府はまたコメントを載せた。

「バイオ燃料は他にもメタノールがあります。メタノールは一酸化炭素と水素を高温、高圧で反応させたり ($\text{CO} + 2\text{H}_2 \rightarrow \text{CH}_3\text{OH}$)、木材を乾留 (空気を入れないで加熱すること) すれば出来ますよ。」

しかし、反論する意見はやはり書き込まれた。

「結局それも加熱するためにエネルギーを使っているじゃないですか！」

「その設備を作るために、どれくらいのエネルギーが必要なんですか？」

それから数日後、政府はまたまたコメントを載せた。

「バイオ燃料以外のエネルギー確保としては、太陽光発電があります。太陽電池を利用すれば、二酸化炭素は全く発生しません。これは実にクリーンな方法だと思います。」

しかし、それでも反論する意見は書き込まれてしまった。

「太陽電池を作るのに必要なケイ素を作るためには、たくさんのエネルギーが必要なんです。岩石の主成分である二酸化ケイ素 60g からケイ素 (分子量 28) の単体 28g を作るためには、 357.4kcal のエネルギーが必要です。熱効率を仮に 35% とすると、約 1000kcal (正確には 1021kcal) のエネルギーが必要になります。これはエタノールなら 0.2 リットルを完全燃焼させた時のエネルギーに相当します。エタノールを 0.2 リットル燃やすと二酸化炭素は 304.7g 排出されるんですよ！どこが全く発生しないなんて言えるんですか？」

参考までに：1000 kcal（＝4186 kJ）のエネルギーを生み出すためにはガソリンだと0.12リットル、重油だと0.11リットルを完全燃焼させる必要があります。

ガソリンの密度を約0.75 g/立方cm、重油の平均密度を0.88 g/立方cmと仮定して、ガソリン0.12リットルと重油0.11リットルを完全燃焼させた場合、二酸化炭素はそれぞれ277.8 g、298.1 g排出されます。

このようないちごっこの状況は、その後も続いた。

そんな中、現在の発電量だけでは日本国民が必要とするエネルギーを到底確保出来ないと見込んだ政府は森林資源をどんどん使い、木炭やバイオ燃料などを大量に作る策に打って出た。

そして森林を切り開いた後には積極的に苗木を植え、排出した二酸化炭素を植林によって埋め合わせるカーボンオフセットという方法をつたい、地球温暖化の防止につながることを訴え続けた。

苦肉の策ではあったが、必要なエネルギーを確保するためにはこうするしかない状況だった。

しかしその年、地球温暖化によって大型化した台風や、集中豪雨などの影響で土砂崩れなどが起き、せっかく植えた苗木だけでなく大きく成長していた木々も次々と流されてしまった。

後にはいくつもの山が崩れ、植物の育たないやせた土壌がむき出しになって残っていた。

もともと政府のやり方に不信感を募らせていた市民達は、そのような状況が起きたことを機に、政府に向かって一斉に反発してきた。「このような自然破壊を行えば、台風や集中豪雨の時、災害の規模が大きくなるのは明らかだったはずです。」

「今の政府は十分な知識もないまま政策を強行する人達の集まりです。」

「総理大臣には退陣を要求します。このままだったら日本はだめになります。」

そのような言い方に、政府もさすがに堪忍袋の尾が切れたのか、それ以降、エネルギー確保のための方法が紹介されることはなかった。

その代わり、次のようなコメントが書き込まれていた。

「読者の皆様へ。今使っている電気がどうやって供給されているのか、今一度考えてみてください。そして、二酸化炭素を排出せず、安全でしかも自然を破壊しなくて済むやり方で、且つ充分な量のエネルギーをする方法があれば教えてください。」

その後、市民からいくつか提案は寄せられてきた。

しかし、どれも決定打と言えるようなものはなかった。

それから、日本ではエネルギー不足に悩まされるようになり、あちこちで停電が頻発するようになった。

その度に、心無い市民からは、政府に苦情が寄せられるようになった。

影響 1 2 生命維持装置の発明

この時期の日本では、地球温暖化がもたらした、過酷なまでの異常気象に人々は苦しんでいた。

世界終末時計は11時59分を指してから、もはや分単位では足りないということになり、ついに秒針が取り付けられることになった。

「こんな世界にはもうとても住めない。」

「何とか逃れる方法があれば教えてくれ。」

「お願いだから、誰か何とかして世界終末時計を戻して！」

もはや熱中症か、自然災害か、あるいは人と人の争いに巻き込まれるかして、死を待つしかないのか。

人々の我慢はとうに限界を超えており、1秒ずつ確実に近づいてくるその時におびえながら毎日を過ごしていた。

そんなある日、ニュースで生命維持装置が一般公開されたという報道がされた。

内容は次のとおりであった。

生命維持装置に入る方を募集します。

この装置は人々を生きたまま半永久的に保存しておくことが出来ます。

最低でも500年は保障しますのでご安心ください。

料金： 1人200万円

定員： 先着200名様

定員になり次第、締め切ります。申し込みはお早めをお願いします。

生命維持装置のある場所に関しては機密情報とさせていただきます。装置に確実に入る方のみお知らせいたします。

このような情報を手に入れて、喜ぶ人が続出した。

「すばらしい発明だ！ぜひ入れてくれ！」

「地球温暖化のためにこんな貧しい世界に住むのは嫌だったの。」

「そうね、いつかまた豊かになって、住みやすい世の中になったら起きたいわね。」

「値段は高いけれど、命には代えられない。行こう！」

彼らは続々と申し込みをしていた。そのため、結果的にたった1日で定員に達してしまった。

その裏で、入りたくても入れなかった人達は必死に技術者達に訴えた。

「いやあつ！！死にたくない！！お願い！どうか装置の中に私を入れて！」

「気持ちは分かるが、それはみんな同じなんだ。どうか分かってくれ。」

「早く次の装置を作って提供してほしい！」

「分かった。あと2年はかかると思うが、何とか我慢してくれ。」

「もうこんな夏は耐えられない！どうか来年の夏までに作って！」

「…何とかして努力は…してみます。」

技術者は、何とかして少しでもたくさんの人達を助けることを約束してくれた。

しかし、その一方で怒って反対する人達も大勢いた。

「現実から逃げるな！卑怯だぞ！」

「お前らだって二酸化炭素輩出てきたんだろうが！」

「あんた達は地球を救う気がないの？」

「最後まで地球温暖化防止のために協力しろ！」

「結局お金のある人しか生き残れないってことなの？」

このような賛否両論の声がある中で、申し込みを済ませた人達は、次々と装置の中に入っていた。

それから1年後。

機密情報であった場所は、ついに反対派の人によって密かに発見されてしまった。

その後、その場所にはいくつもの落書きや貼り紙が残されていた。

「未来の人達へ

ここに眠っている人達は、私達の世界を裏切って、自分達だけ助かろうとした人達です。」

「多分、この人達は豊かな世の中でなければ生きていく意志がない連中です。」

「もし辛くなったらその度に『来たくてこんな世界に来たわけじゃないんだ！もっと豊かになってから目覚めたかったよ！』と言って、この装置の中に入っていつてしまうと思います。」

「絶対にこんな人達を起こしちゃーよ。」

…結局、私達は地球温暖化という問題からは逃げられない運命にあることを認識させられる結果になった。

…世界終末時計が12時を指すまで、あと50秒…。

…あと49秒…。

…あと48秒…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012f/>

地球温暖化物語

2010年10月8日15時21分発行